

「大日本帝国」下の反ユダヤ主義とユダヤ人難民

金子・マーティン

はじめに

『ユダヤ人対策要綱』と杉原千畝

日本の「ユダヤ問題専門家」たち

ユダヤ人難民の流入

ユダヤ人難民報道にみられる反ユダヤ主義

はじめに

日本国在住のユダヤ系住民は、戦前においても戦後においても極めて少数だが、そのことによって日本国ならびにその国民が反ユダヤ主義の言説とまったく無縁であったとはいえない。それどころか、日本は現在でも「反ユダヤ主義の本が最もよく売れる国の一つ」¹なのである。歴史的にも、日本は1920年代から流布した伝統的な「ユダヤ人陰謀論」からはじまり、現在の「ホロコースト否定論」にいたるまで、さまざまな反ユダヤ主義が存在したし、現在も存在する²。そしてこの「ホロコーストの否定やその矮小化を目的とする『歴史修正主義』こそ、反ユダヤ主義の新しい現象形態」³なのである。

そうした「歴史修正主義者」＝歴史改竄主義者によるホロコーストの否定や矮小化と同等の主張が、南京大虐殺の否定・矮小化や正当化を試みる言説である。「アウシュヴィッツが、ナチス・ドイツの戦争犯罪の象徴であるように、南京大虐殺が日本軍の戦争犯罪を象徴する事件だった」⁴。ホロコーストも南京大虐殺もともに「人道に対する罪」に該当する戦争犯罪だが、その動機、性格や規模などかなりの相違があり、両者を同列に論じること、その単純な比較も不正確であると考えられる。だが、「国民がその歴史事実を直視し、深刻な教訓を得ようとするのを妨害し、抑圧する政治勢力が病巣のように存在して活動している点では日本もドイツもまったく共通している」⁵。そして、この南京大虐殺の否定・矮小化の言説には、日本における反ユダヤ主義の否定ないし矮小化の言説が重なっていることに注意しなければならない。

『ユダヤ人対策要綱』と杉原千畝

2000年秋、南京大虐殺全面否定論を内容とする英語図書2冊が、日本において刊行された。「未

¹ 鶴岡哲「歴史修正主義 ヨーロッパと日本」(『インパクション』No.102、インパクト出版会、1997年4月)、58頁。

² 梶村太郎ほか『ジャーナリズムと歴史認識 ホロコーストをどう伝えるか』、凱風社、1999年、および Uwe Makino, "Im Osten nichts Neues?" in: Wolfgang Benz(Hg.), *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 10, Campus, Frankfurt / New York, 2001, S.204-222. 参照。

³ Wolfgang Neugebauer, "Antisemitismus und Rechtsextremismus nach 1945." In: ...*ihrer Überzeugung treu geblieben. Rechtsextremisten, "Revisionisten" und Antisemiten in Österreich*, Dokumentationsarchiv

des österreichischen Widerstandes, Wien, 1996, S. 41.

⁴ 藤原彰「歴史修正主義の南京大虐殺非定論は右翼の言い分そのものだ」(南京事件調査研究会編『南京大虐殺否定論 13 のウソ』、柏書房、1999年)、242頁。

⁵ 笠原十九司『南京事件と三光作戦』、大月書店、1999年、50頁。

来政治経済調査研究所」(Future Political Economy Research Institute)を名乗る正体不明の組織が、欧米諸国のアジア研究機関へ無料送付した田中正明著『南京事件の総括』(謙光社、1987年)の部分訳である全145ページの*What Really Happened in Nanking* (世界出版、2000年)がそのひとつであり、もう一つは「日英バイリンガル」と銘打った『再審「南京大虐殺」』。世界に訴える日本の冤罪』= *The Alleged 'Nanking Massacre'. Japan's rebuttal to China's forged claims* (明成社、2000年)である⁶。後者の著者は竹本忠雄筑波大学名誉教授と大原康男國學院大学教授とされているが、その編集は「日本会議国際広報委員会(Committee for International Affairs, Nippon Kaigi)」である。改憲団体かつ歴史改竄集団でもある2つの組織、「日本を守る会」(1974年結成)と「日本を守る国民会議」(1981年結成)とが1997年5月に統合し、発足したのが「日本会議」である。その「日本会議」の編集による『再審「南京大虐殺」』には以下のような文が含まれている。

「南京戦当時の日本はドイツと防共協定を結んで友好関係にあったが、ドイツのユダヤ人迫害政策については、断固として拒否していたという重大な事実があることを知らねばならない。南京戦からほぼ1年たった昭和13年(1938)12月、日本政府は『多年主張シ来レル人種平等ノ

精神』に基づいて『猶太人ニ対シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ特別ニ排斥スルカ如キ処置ニ出ツルコトナシ』との方針を決定した。この決定があったからこそ、あの“和製シンドラ”杉原千畝の精力的な活動も可能になり、多くのユダヤ人が救われたのである。日本人が極端な人種差別から生み出されたナチス・ドイツのホロコーストとは縁遠い存在であることはこの史実からも窺われよう」⁷。

39年11月から翌年9月初旬までの1年間ほど、リトアニアのカウナスで日本領事代理を務めた杉原千畝(1900-86)は、ユダヤ人難民に数千通の日本通過ヴィザを発給した。杉原のその行動は、「ユダヤ人にはいかなる特別待遇も与えないという、政府の方針に真っ向から対立していた。政府は杉原の利他的な不服従をよしとせず、戦後に、外交官の資格をうばった」⁸。「戦後の外務省の対応に無礼があった」と外相が遺族に謝罪をし、杉原千畝の「名誉回復」が図られたのは、2000年10月になってからのことである⁹。そうした事実を隠蔽したまま、杉原を「ナチスの迫害からユダヤ人を救った日本人」として賞賛し、当時の日本政府を「人種平等を貫いた」ものであるかのごとく描くことは、戦時下日本の反ユダヤ主義から目をそらそうとする

⁷ 日本会議国際広報委員会編『再審「南京大虐殺」』。世界に訴える日本の冤罪』、明成社、2000年、133-134頁。

⁸ デイヴィッド・グッドマン&宮澤正典(藤本和子訳)『ユダヤ人陰謀説 日本の反ユダヤと親ユダヤ』、講談社、1999年、210頁。

⁹ 「杉浦千畝氏、半世紀経て『名誉回復』」、『朝日新聞』2000年10月11日。

⁶ 金子マーティン「海外進出を目論む厚顔無恥な南京大虐殺『虚構派』」(『部落解放ひろしま』No.54。部落解放同盟広島県連合会、2001年9月)、59-83頁参照。

「歴史修正主義」にほかはない。

「日本会議」はさらに、「誇りある国づくりをめざすオピニオン誌」を銘打ったその機関誌『日本の息吹』に、日本におけるユダヤ人問題の第一人者である宮澤正典のインタビューを載せている。そこで宮澤は、杉原千畝について、「私はもちろん杉原という人に敬意を表します。並の外交官ではなかった。しかし、杉原といえども、『猶太人対策要綱』がなく反ユダヤ政策をとる政府の下では、ビザ発給は不可能だったと思います。彼は、独断で、国の大方針に反してやったのではなく、あくまでも、合法ぎりぎりのところでビザを発給したのだと思います」と発言している。日本政府のユダヤ人対策と「要綱」については次のように述べている。「ユダヤ人問題に対し、日本は決してドイツの言いなりではありませんでした。1933（昭和8）年に政権を握ったヒトラーは、ユダヤ人排斥を進め、1935年にはユダヤ人避難民問題は大きな国際問題になってきました。同年、国際連盟は日本にもその対応を問い合わせてきたのです。これに対し、日本は『独逸避難民ニ関スル件』と題する政府見解をまとめました。（．．．）昭和10年の時点でユダヤ人差別などということは何らやっていない。（．．．）日本はユダヤ人避難民問題に対する本格的な対策を検討する必要性に迫られました。最終的に着落したのは昭和13年12月6日の五相会議（首相、外相、蔵相、陸相、海相）で決定された「猶太人対策要綱」です。これが昭和16年の日米開戦まで、日本のユダヤ

政策の根幹となった重要な方針です」¹⁰。

こうしたインタビューでの宮澤の発言が、氏の本意であるのかどうかは確認できない。しかし、少なくとも「日本会議」の「要綱」の説明は、その本質についてはいない。

上で引用した「日本会議」編集の南京大虐殺全面否定本が紹介する文章、「猶太人ニ対シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ特別ニ排斥スルカ如キ処置ニ出ツルコトナシ」は、「現在日、満、支ニ居住スル」の言葉ではじまっている「猶太人対策要綱」の第一項である。「長年主張シ来レル人種平等ノ精神」も、要綱の前文に含まれている一節である。しかし、「猶太人対策要綱」は全三項からなっており、前文には「帝国ノ直面セル非常時局ニ於テ戦争ノ遂行特ニ経済建設上外資ヲ導入スルノ必要ト対米関係ノ悪化スルコトヲ避クヘキ観点ヨリ」という文もある。第三項は、「猶太人ヲ積極的二日、満、支ニ招致スルカ如キハ之ヲ避ク、但シ、資本家、技術家ノ如キ特ニ利用価値アルモノハ之ノ限りニ非ス」と謳っている¹¹。つまり、この「要綱」は、人道上の観点から発せられた親ユダヤ的な処置なのではなく、むしろその主眼はユダヤ人の資本や技術を日本の「聖戦」遂行に役立たせようとしたところにあったことは自明であろう。少なからぬ日本人が抱いていた偏見、「世界経済を牛耳るユダヤ人」像がその背景としてあった

¹⁰ 「人種平等を貫いたユダヤ人政策 宮澤正典教授に聞く」（日本会議『日本の息吹』、平成10年〔1998年〕9月号）、6-8頁。

¹¹ 松浦寛『ユダヤ陰謀説の正体』、筑摩書房、1999年、16-17頁。

ものと考えられる。

この「猶太人対策要綱」は42年3月に廃止されたが、その理由もその本質をあらわにしていた。

「大東亜戦争勃発により猶太人利用による外資導入や対米関係打開の必要がなくなった為と、盟邦独逸が1月1日海外在住猶太人の独逸国籍を剥奪したため、彼等を無国籍人と見做し、白系露人に準じて取扱ふことにした」というのがその廃止理由であった¹²。そこからは、「要綱」が実はユダヤ人の経済的利用論に基づくものにほかならなかったことが読み取れるのではないだろうか。

日本の「ユダヤ問題専門家」たち

世界最初の社会主義革命、1917年10月（ロシア暦）のソヴィエト政権樹立革命に対する干渉を目的として、西欧諸国はシベリアへ軍隊を送ったが、日本国も1918年7月から22年10月にかけて出兵した。日本軍将兵たちはシベリアで、反革命軍から反ユダヤ主義の宣伝文書類を提供され、その「差別思想」に感化され、そうした軍人のなかから、日本のいわゆる「ユダヤ問題専門家」たちが生まれた。1938年3月から大連特務機関長となった安江仙弘（1888－1950）もその一人である。安江は、悪名高き『シオン賢者の議定書』を、包荒子なるペンネームで『世界革命之裏面』（二酉社、1924年）という書名で、

日本で最も早く翻訳している¹³。

1936年2月に「猶太問題二関スル研究調査、国内竝ニ対外連絡及情報報道ヲ会員ニ行フヲ目的」とする「国際政経学会」が成立¹⁴、同年11月には機関誌の『国際秘密力の研究』第一冊が発行された。ちなみに、「国際政経学会」は外務省の外郭団体であり、外務省の調査部第二課がユダヤ問題を担当していた¹⁵。その『国際秘密力の研究』は1940年4月発行の第6冊まで続したが、その執筆者たちは主としてシベリアで感化を受けた「ユダヤ問題専門家」たちであった。そのため彼らは、ユダヤ民族を共産主義者と見なし、シオン主義者として「ユダヤ人の友」の衣をまとっている者もいたが、実はこぞって反ユダヤ・反共・国粹主義者であった。たとえば長谷川泰造（満鉄職員、生没年不詳）は、同『研究』の第1冊から第4冊まで（36年11月～38年3月）に「シオンのプロトコール」という訳名で『シオン賢者の議定書』の和訳を連載している。

『国際秘密力の研究』第6冊には、「上海に於ける猶太人避難民に就て」という6ページほどの記事が掲載されているが、それと並んで「全

¹³ 松浦、前掲書、20-21頁。なお、この『シオン賢者の議定書』が、「フリー・メーソンリーと猶太人」とに対する西洋人伝来の反感を利用して、ボルセヴィズムに対する不信を唆らんが為めに作った、所謂偽にする所ある贋本に外ならない」ことを、早い時期から見抜いていた日本人研究者もいた。吉野作造「所謂国際的秘結社の正体」（『中央公論』No396、1921年6月）、28頁。

¹⁴ 『国際秘密力の研究』No1、国際政経学会、1936年11月、412頁。

¹⁵ 加瀬英明「日本のなかのユダヤ人」（『中央公論』No1006、1971年5月）、239頁。

¹² 松浦、前掲書、23頁。

世界猶太情報」と題するページに、「極東猶太民族会議神戸状況」という五行ほどの短いコメントがある。それは、1939年に成立した「神戸ユダヤ人会議」の成立を報告している。「4月23日在神アシケナージ派猶太人の総会が行われ、（．．．）協会を結成し協会幹部の選任が行われた」¹⁶と。そして、この「会議」はハルピンとの密接な関係をもっていたことが、『神戸新聞』の記事からも明らかである。1939年4月25日の同紙は、「在神全ユダヤ人が結束して反共へ 神戸ユダヤ人会議を組織して日本絶対信頼を標榜」という見出しで、「ハルピンの極東ユダヤ民族会議（会長カウフマン博士）と連絡をとって反共産主義の政治運動を起こすことを決定」と述べているからである。同記事によれば、「在神ユダヤ人は約250名」であり、「在神外人貿易を牛耳る貿易商は殆どユダヤ人」とされている。「神戸ユダヤ人会議」の「会長はエバンス三郎（ユダヤ系帰化人）」であった¹⁷。この「エバンス三郎」とはエヴァンス・サム（Evans Sam）のことであり、もともとエヴァンスコフスキー・サミュエル（Evanskoffsky Samuel）と称し、1919年から神戸に在住するロシア系ユダヤ人であった¹⁸。

『国際秘密力の研究』を引き継いだ「国際政

経学会」の機関誌は、1941年5月に第1巻第1号が発行された月刊の『猶太研究』である。同誌は「昭和19（1944）年11・12月合併号」＝第4巻第7号まで続刊されたが、その最終号が発行されたのは45年3月である¹⁹。その『猶太研究』の第1巻には、四王天延孝（別名・藤原信孝、1879－1962）が書いた神戸のユダヤ人の様子を描いた次のような文章が載っている。「三宮駅に着くと短身無帽の外人群が、人待ち顔にキョトキョトとしてゐるのが目に立つ。少し共ユダヤ問題に注意する人には、直に外観だけでもユダヤ避難民と気が付く。この問題に注意しない人には、それがユダヤ避難民と聞かされても、只さうかと聞き流したり、又はアゝ可哀想にと同情するだけであらう。然るに此の問題を研究した人には、彼等の大幹部の画策による世界共和国運動の為に、世界大戦が起り、その煽りを受けて、東洋を通過して彼等の楽園アメリカへ渡る人々である。（．．．）駈け廻つて調べて見ると、昨年7月頃から8ヶ月の間に敦賀経由で神戸に来て船を待ち、アメリカに渡つたユダヤ避難民は約2千人に上り、現在神戸に溜つてゐるのが6百人もあつて、船便の都合が悪く困つてゐる様である」²⁰。

¹⁶ 『国際秘密力の研究』No6、1940年4月、123頁。

¹⁷ 『神戸新聞』1939年4月25日。

¹⁸ Marvin Tokayer & Mary Swartz, *The Fugu Plan*, Paddington Press, New York, 1979, p.133.なお、同書は“Jewish community (Ashkanazim) of Kobe”の結成を1937年としているが、1937年10月15日の『神戸新聞』には、「ユダヤ人協会起つ」との記事が掲載されている。

¹⁹ 極東アジアのユダヤ人移民に関する著書『極東の放浪者と移住者』においてハーマン・ダイカーは、『猶太研究』は1943年6月号をもって廃刊された」と書いており、その誤りは、欧米の他の研究者によって繰り返されてきた。Herman Dicker, *Wanderers and Settlers in the Far East*, Twayne Publishers, New York, 1962, p.76. / David Kranzler, *Japanese, Nazis & Jews*, Yeshiva University Press, New York, 1976, p.172 & 260. / Brigit Pansa, *Juden unter japanischer Herrschaft*, iudicim verlag, München, 1999, S.37.

²⁰ 四天王延孝「避難猶太人と米国支配計画」（『猶太研究』第1巻第1号、国際政経学会、1941年5月）、18頁。

この四王天延孝は、ドイツで開催された「猶太人問題会議」にも出席し、ナチス・イデオロギーの強い影響を受けた、戦前日本の反ユダヤ主義者のリーダー格の人物であり、「日本反ユダヤ協会」会長も務めた²¹。第二次世界大戦は「ユダヤ人の陰謀」によって引き起こされたと信じていた退役陸軍中將の四王天は、「翼賛政治体制協議会の御推薦を蒙り」、1942年4月の戦時最後の衆議院議員選挙に、「米、英の指導者を操つる秘密結社及び『ユダヤ』幹部」²²云々というような反ユダヤ主義的政治綱領を掲げて東京5区から立候補し、全国最高得票数で当選した。国会議員となった四王天は44年1月の帝国議会において、政府のユダヤ人対策について質問し、数名の閣僚がそれに答えている。たとえば、内相の安藤紀三郎（1879-1954）は次のように答弁した。「人種差別の撤廃といふことについては無差別平等に非ず、自然の儘に差別の存する中に於て、所謂日本は万邦をしてその処を得せしめ兆民をしてその居に安んぜしめるといふ。その適所を得て所謂差別の存する処に大きい公平の存する事を意味するものと私は考へる、従つて社会に眞の差別の存することは現実である。（．．．）政府が人種差別の撤廃を叫ぶと云うことは、只今四王天君の言ふ如く絶対平等視して之を扱ふといふことではなく、所謂日本肇国の理想そのものに差別の存することを認めつゝ而

もその差別のあるものをして各々その所を得、安定し人生の幸福を享有せしめむる、言葉を替へて言へば共存共栄の実を挙げて行く」²³。この答弁は、安藤が「人種差別の撤廃」や「無差別平等」という概念をまったくもって身勝手に国粹主義的にしか理解していないことをはっきりと示している。戦時下日本政府が唱えた「人種差別撤廃」や「無差別平等」＝「八紘一宇」の内実は、そのようなものだった。いずれにせよ、日本至上主義者の四王天は45年12月にA級戦犯容疑者として逮捕され、スガモ・プリズンに拘禁され、国際検事局の尋問を受けた²⁴。

駐ドイツ大使の大島浩（1886-1975）とともに1940年の日独伊三国同盟締結の立役者であり、38年末から40年末までの駐イタリア大使だった白鳥敏夫（1887-1949）も、四王天延孝に引けを取らない狂信的な反ユダヤ主義者だった。「日本と猶太」と題する白鳥の講演が『猶太研究』に掲載されている。白鳥は、天皇崇拜思想と反ユダヤ主義とが表裏一体の関係にあったことを、その神懸りの講演で証明してみせた。曰く、「今上閣下の御詔勅を拝しますと世界の全人類の安定平和を念願遊ばされて居らるゝ大御心が一貫して居ります。此れは畏れながら日本の天皇様が世界を救済し安定せしめらるゝ中心、即ち世界の天皇としての御天職を現はしていらせられるものと拝察するのであります。（．．．）日

²¹ 秦郁彦『日本陸海軍総合辞典』、東京大学出版会、1991年、70頁。

²² 横山昇一編『大東亜建設代議士政見大観』、都市情報社、1943年、319-321頁。

²³ 「帝国議会に於けるユダヤ問答」（『猶太研究』第4巻第2号、1944年3月）、46-47頁。

²⁴ 栗屋憲太郎・吉田裕編『国際検事局尋問調書』第23巻、日本図書センター、1993年、28-30頁。

本が世界の祖国である。人類の祖国である。

(...) 猶太の謀略なるものは並々ならぬもので、(...) 日本天皇の全人類の天皇だといふ御天職を奪つて、自ら天下に、即ち全人類に君臨せんとする途方もない大きな野望を持つてゐる。(...) その猶太人がこの全世界、世界人類に君臨しようといふ大それた考へを持つてゐる。(...) この戦争は日本天皇と猶太の戦と申し得るのであります」²⁵。

ここでは、戦時下日本の中心的国家イデオロギーの「天皇現人神」神話と、ヨーロッパ社会の伝統的差別思想の「ユダヤ人陰謀」神話とが、物の見事に絡み合っている。この狂信的天皇崇拜主義者の白鳥が、「国際政経学会」と外務省の仲介役をはたしたようである。なお、白鳥敏夫も大島浩とともにA級戦犯となった。

ユダヤ人難民の流入

いつごろからユダヤ人難民たちが神戸へ流入するようになったのか。それについてはさまざまな説がある。『大阪毎日新聞』は「昨年5月ごろ」、つまり1940年5月からと報じている²⁶。ところが別の資料は、「ユダヤ人避難民第一陣日本到着」の日付を「昭和15年1月6日」と明確に断定している。

「昭和15年1月6日は、敦賀でもとくに寒い日だった。日本海から冷たい風が、敦賀駅になく

りつけるように吹いていた。駅には、百人近い異様な風体の西洋人が集っていた。彼らはちょうど、関東州の大連から連絡船に乗って、日本へ着いたヨーロッパからの避難民であった。

(...) この避難民のグループは、ヨーロッパからナチの魔手を逃れて日本に着いた第一陣であった。(...) リトアニアの日本領事館で日本の入国査証を手に入れ、シベリア鉄道で満州までだどりついたのであった。全員が膝まで隠れる長い外套を着て、故郷の小さな町ではユダヤ教の戒律を厳しく守って、髭を剃らないので、黒い山羊髭を垂らしていた。敦賀駅から、神戸に向おうとしていたのである」²⁷。

あたかもその現場を目撃した体験記のような記述だが、著者の加瀬英明がこれを自ら体験したとは考え難い。というのは、加瀬は1936年12月22日の生まれであり、「昭和15年1月6日」当時はまだ3歳と2週間という年齢だったからである。1904年生まれの実父、外交官だった加瀬俊一から聞いた話なのかも知れない。戦時中、加瀬俊一は外相・松岡洋介(1880-1946)の秘書官だった。敗戦後、日本の初代国連大使となった加瀬俊一は、「日本を守る国民会議」の議長も務めた。息子の加瀬英明は“タカ派”外交評論家として、「日本を守る国民会議」の後継組織「日本会議」の東京支部長となった。加瀬父子はともに極右組織の幹部活動家であった。日本の「ユダヤ問題専門家」たちは戦時中のみな

²⁵ 白鳥敏夫「日本と猶太」(『猶太研究』第2巻第8号、1942年8月)、117-119頁。

²⁶ 「新興独逸が怖いぞ ユダヤ人、ドイツと敦賀に到着 逐はれた民の図太い態度」、『大阪毎日新聞』1941年2月14日。

²⁷ 加瀬、前掲論文、234頁。

らず、現在にいたっても日本の国家主義運動と絡まっているようだ。そして、シオニズム運動とも連携を保っている可能性がある。メアリー・スオーツとの共著『河豚計画』（加藤明彦訳、TBSブリタニカ、1979年）の他、数多くの著作がある日本ユダヤ教団のラビ、マーヴィン・トケイヤーの本は、10冊が日本語訳になっているが、そのうち6冊の訳者が加藤英明である。

「国際政経学会」のみに「ユダヤ問題専門家」がいたわけでない。南満州鉄道の調査部も『猶太問題調査資料』や『ユダヤ問題時報』を刊行していた。小辻節三（1899-1973）は、39年10月から40年7月まで、満鉄調査部に「ユダヤ問題専門家」として勤務した。東京とカリフォルニアの大学で宗教学を学んだ小辻は、ヘブライ語が堪能だったようだが、彼については不明なことが多い。ラビ・トケイヤーは『河豚計画』の「日本版への序」において、「小辻氏はユダヤ人によって記憶され、同胞によって無視された」と、記している²⁸。小辻は「太平洋戦争の直後」[原書：after Pearl Harbor, p.273]、その親ユダヤ的、親西洋的態度のため憲兵隊からきびしく取り調べを受けた。そのためハルビンに移り、同地のユダヤ人たちによって保護された。（...）一九五九年、六十歳のときはじめてイスラエルに旅行し、ユダヤ教に改宗、ファーストネームもアブラハムと改めた²⁹。

小辻の満鉄退職後に行われた調査なので、恐らく彼はそれに関与していないとみられるが、その『ユダヤ問題時報』に「神戸通過避難民概況」が載っている。1941年「5月中旬神戸に於ける猶太避難民の滞留者は約1千3百及至4百名で、日本に定住を希望する者多いか当局ではそれを許さぬので目的地を求めて出発しつつある。

（...）昨夏以来神戸から米洲諸国へ向つた猶太人は約4千人に達す。」ユダヤ人難民が日本へ来ることを、当時の日本の行政機関は諸手を挙げて歓迎していたわけでないことが判る。神戸におけるユダヤ人難民の統計も掲載されており、それによれば1941年2月7日までの「神戸到着者」は2791人、同日までの「神戸出発者」が2300人を数え、「神戸残留者」は491人となっている。到着者を出発地別にみると、「独逸」が2098人で4分の3強を占める。なお、1938年3月に無抵抗でドイツに「合併」されたオーストリアもこの「独逸」に含まれているものと考えられる。ドイツについて多い出発地は「波蘭・リトワ」、つまりポーランドとリトアニアである。ドイツ系ユダヤ人難民のうち、2月7日段階の「残留者」は5パーセントほどに過ぎないが、ポーランドなど東欧諸国系ユダヤ人難民の場合は57パ

ツジの自伝をみるかぎり、この記述は正確でない。憲兵隊による取り調べを小辻が受けたのは「太平洋戦争の直後」でなく、「パール・ハーバー奇襲攻撃」のかなり後、「一九四四年秋」のことであり、家族とともにハルビン(Ha'erbin)へ移ったのは敗戦直前の「一九四五年六月」であった。Abraham Kotsuji, *From Tokyo to Jerusalem*, Bernard Geis Associates, New York, 1964, p.178-184.ハルビンへ逃亡するまで、小辻は「希伯来文化研究所長」だったようだ。小辻節三『ユダヤ民族の姿』、目黒書店、1943年、奥付の著者略歴。

²⁸ M.トケイヤー/M.シュオーツ（加藤英明訳）『河豚計画』、TBSブリタニカ、1979年。

²⁹ 同書、260-261頁。しかし、英語で書かれたアブラハム・コ

一セントが「残留者」である。日本政府は、この「残留者」を受け入れ停止の理由にしていたようである。「在欧各日本領事館は当分通過査証の発給を停止することになった。其の理由として波蘭、リトワニア等東欧出身の猶太避難民約二千名が日本に停滞しているためである」³⁰と。

神戸のユダヤ人難民の人数については、同時期の新聞も報じている。1941年2月6日までに神戸へ到着したユダヤ人難民は、敦賀経由で5500人、下関経由で1416人、合計約7000人とされている³¹。各国におけるユダヤ人難民に関する戦後出版の図書も、「中継地日本」を経由したユダヤ人難民の総数を「約7000人」としている³²。

神戸へのユダヤ人難民の流入がはじまる以前から、日本軍の占領下にあった上海には、多数のユダヤ難民が押し掛けてきていた。「ナチの排猶の結果、1938年春頃から約3万名の独逸系避難ユダヤ人が上海に怒涛のように流れこんできた」³³ので、海軍大佐の犬塚惟重(1890-1965)はたびたび上海へ出張した。犬塚も「ユダヤ問題専門家」の1人であり、宇都宮希洋なるペンネームでの反ユダヤ主義的出版活動に余念がなかった。『国際秘密力の研究』第1冊でも、「宇都

宮希洋氏は官界に於ける猶太問題研究の権威者」と紹介されている。とりわけ1938年11月の

「水晶の夜」(ナチスによるユダヤ人迫害事件)以降、ヴィザなしで入国可能だった上海へ2万人近くのユダヤ人難民(その大半はドイツ系とオーストリア系のユダヤ人)が流入したが、その上海で1939年4月に、ユダヤ人の扱いを専門とする「犬塚機関」が誕生した。犬塚は1942年3月まで同地に留まったが、彼が上海から去った約1年後、43年2月18日に日本海軍は上海・虹口地区にユダヤ人特別居住区(ゲットー)を設けた。

その規則は次のようなものであった。「1、上海の無国籍避難民の居住地域及び商業地域は、軍事的理由から上海共同租界内の特別居住地区内に限定される。2、その特別居住地区外に住居や商店を有する無国籍避難民は、1943年5月18日までにその住居や商店を指定地域内へ移転せねばならない。3、無国籍避難民以外の何人も、その特別居住地区内での居住は許されない。4、この布告に違反した者は厳罰に処す」³⁴。そこには、

「ユダヤ人」という言葉も、「ゲットー」という言葉もないが、「無国籍避難民」という語こそが42年1月1日から国籍を剥奪された「第三帝国」およびナチス勢力圏出身のユダヤ人を、そして「特別居住地区」がゲットーを意味していた。上海ゲットーのユダヤ人難民は「ユ」と記された身分証明書の携帯を義務づけられており、「上海ゲットーの生活も窮乏と貧困に満ちたも

³⁰ 「神戸通過避難民概況」(『ユダヤ問題時報』No23、満鉄調査部、1941年6月)、61-63頁。

³¹ 「家まで借りて船待ち “戦禍の渡り鳥”ユダヤ人 日本を足場に溢れ来る」、『大阪毎日新聞』1941年2月7日。

³² Kurt Grossmann, *Emigration*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt, 1969, S.249.

³³ 犬塚惟重「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」(『自由』1973年2月、自由社)、231頁。なお、この論文の初版は『世界と日本』1961年5月号に掲載。

³⁴ Herman Dicker, 前掲書、p.118より金子訳。

のだったが、それでもヨーロッパ各地のゲットーと比べて、それほど耐え難いものではなかった」³⁵。

犬塚惟重の元秘書で彼の後妻となった犬塚(旧姓:新明)きよ子は、1941年5月半ばに惟重とともに神戸を訪問、神戸ユダヤ協会幹部の案内で「ユダヤ人難民寄宿舍18カ所のうち、3カ所を視察」したと書いている³⁶。だが、『河豚計画』によれば、41年5月に神戸を訪れたのは犬塚惟重ひとりであり、「彼の活気に満ちた妾は上海に残った」とのことである³⁷。いずれにせよ、「コブノ(現在のリトアニアの首都カウナス)日本領事館閉鎖後の日本通過査証は、日本外務、内務両省協議のうえモスクワ大使館が発給しているために、(…)思いもよらぬ6千名余にのぼるユダヤ人が日本への通過査証を獲得できる結果となった」と、犬塚きよ子は主張する。彼女が紹介する「神戸ユダヤ人協会に提出された報告書」によると、1940年7月1日から41年4月15日までに神戸へ着いたユダヤ人が2797人、4月現在神戸に停滞中のユダヤ人は1591人、その合計は4388人となる³⁸。

神戸ユダヤ人協会(Kobe Jewcom)が作成した難民統計(Kobe Report)を引用する書籍・雑誌論文や新聞記事は少なくないが、その1つは以下のような数字を引いている。1940年7月から41年11

月までに神戸へ流入したユダヤ人難民の総数は4608人を数えた。2116人がドイツ系、2101人がポーランド系で315人がその他となっている³⁹。

ユダヤ人難民報道にみられる反ユダヤ主義

こうした神戸へのユダヤ人難民の流入は、ジャーナリズムの報道を通して日本国民の反ユダヤ主義的風潮を強化していった。以下においては、そうしたジャーナリズムを通じての反ユダヤ宣伝がどのような性格のものであったのかを見ていく⁴⁰。

ユダヤ人難民についての日本での初期新聞報道は、日本軍の支配下にあった中国東北部、「華北」および「満州」に関連する。1938年11月末、天津の英仏疎開に在住のユダヤ人たちは、ドイツから追放されたユダヤ人難民2000人を保護しようとした。だが、日本軍は「慎重に調査した結果今回ドイツより放逐されたものゝ多くは赤色共産分子なることが判明したので、治安確保の建前からユダヤ人の天津来住を断然拒絶することに決定」したと、『神戸新聞』は報じている⁴¹。それは、ユダヤ人総体が共産主義者と同

³⁹ Pamela Shatzkes, "Kobe: A Japanese Haven for Jewish Refugees, 1940-1941", in: *Japan Forum*, Vol. 3-No. 2, Oxford University Press, October 1991, p. 272.

⁴⁰ 宮澤正典「日本への避難ユダヤ人と新聞」(『ユダヤ・イスラエル研究』No.11. 1988年10月、日本イスラエル文化研究会、43-49頁)は、『大阪朝日』と『大阪毎日』のユダヤ難民関係記事を紹介しているが、本論では主として『神戸新聞』の記事を分析・検討する。

⁴¹ 「ユダヤ人の北支入り禁止」、『神戸新聞』1938年11月30日。なお、同名の記事が同日の『大阪毎日新聞』と『大阪朝日新聞』にも載っている。

³⁵ "Shanghai", in: *Enzyklopädie des Holocaust* Bd.3, Piper, München/Zürich, 1995, S.1280.

³⁶ 犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作』、日本工業新聞社、1982年、275-276頁。

³⁷ Tokayer & Swartz, 前掲書、p.167.

³⁸ 犬塚きよ子、前掲書、276-277頁。

一視されている一例だといえよう。

その約八ヶ月前の同年3月にも「追放されたユダヤ人（．．．）約2万人が、満州里駅西方のオトポールに詰めかけ入満を希望した」。しかし、「満州国はピタッと門戸を封鎖した。ユダヤ人たちは、わずかばかりの荷物と少額の旅費を持って野營的生活をしながらオトポール駅に屯ろしている。（．．．）『五族共和』をモットーとする、『万民安居樂業』を呼号する満州国の態度は不可思議千万であった。（．．．）私は某日、満州国外交部ハルビン代表部主任某君の来訪を求め、この問題に関して種々協議した。（．．．）その後、外交部の決定としてともかくも満州里駅通過、潮のごとくユダヤ人流民がハルビンに流れ込んで来たのであった」⁴²。1937年8月からハルビンス務機関長に就任した樋口季一郎（1888－1970）の回想録にある記述である。

「2万のユダヤ人を救った」と称する樋口の回想録には、以下のような無視できない記述もある。「私はこの流民中、日本科学の推進のため利用し得る人物の探索を部下に要望した。フランクフルト人造ゴム製造技師、その他数人の有望科学者を発見したのであるが、内地業界当事者と給料の点で折り合いが合わず、何れもアメリカに去ったのであった」と樋口は書いている

⁴³。ここには、上述の「猶太人対策要綱」にみられたのと同様の、ユダヤ人利用論が露見している。

さらに面白いのは、樋口も「ユダヤ問題専門家」の1人に属するのだが、彼は「ユダヤ問題専門家」を「排ユダヤ主義者」と「親ユダヤ主義者」に分けていることである。彼は以下のように述べている。「日本においてユダヤ民族研究に一指を染めた先覚者は、四王天中佐（後の中将）と酒井將軍であった。前者は排ユダヤ主義者であり、後者は親ユダヤ主義者である」と⁴⁴。樋口が「酒井將軍」と表記しているのは、酒井勝軍（1870－1939）のことである。酒井は「日本を以てダビデ王国の後半身なりと断ぜんとす」という、突飛な「日ユ同祖論」を唱えた人物であり、『シオン賢者の議定書』をもとにして書かれた『猶太民族の大陰謀』（内外書房、1924年）という本を書き、「あからさまに反ユダヤ主義の意見を表明して」いた。しかし同時に酒井は「原理主義的なシオニズム支持者」でもあって、自ら「余はシオン主義者なり」などと唱えていた⁴⁵。ということは、樋口のいう「親ユダヤ主義者」とは、日本人シオニストに他ならなかったことになる。

樋口が「ユダヤ人難民事件に遭遇」した約2年後、満州里のユダヤ人難民について、以下のような新聞報道がなされている。「満ソ国境駅

⁴² 樋口季一郎『陸軍中将樋口季一郎回想録』、芙蓉書房、1999年、352頁。同書の初版は『アッツ、キスカ軍司令官の回想録』（芙蓉書房、1971年）である。

⁴³ 樋口、前掲書、352-353頁。

⁴⁴ 樋口、前掲書、355頁。

⁴⁵ グッドマン&宮澤、前掲書、145-147頁。

満州里は空前の旅客のラッシュを現出し本年1月から7月末までの同駅通過旅客数は入満1003名、出満1185名で昨年中合計のざつと2倍あまりといふ盛況、旅客の8割はドイツ人だがそのドイツ人の大部分はユダヤ人である」⁴⁶。同記事の見出し「不敵な薄笑ひ 満州里にユダヤ人の群」にすでに差別的な気配を感じるが、小見出しも「煙草をふかす女」「食堂で無銭飲食」と悪意にみちている。当時日本に在住していたユダヤ人は約1000人で、ほとんどの日本人がユダヤ人を直接見たこともないにもかかわらず、多くの日本人がユダヤ人に対して漠然とした恐怖感や嫌悪感をもっていたであろう。こうした悪意に満ちた新聞報道はそうした感情を増幅し、日本の「当事者不在の反ユダヤ主義」を強化していったと考えられる。

港町神戸のユダヤ人難民に関する報道が『神戸新聞』に登場するのは、1939年1月からである。「ユダヤ人お断り。神戸港でも昨年の暮から上陸禁止を断行」（『神戸新聞』1939年1月15日）が最初の記事である。1940年夏以降になるとハルビン、上海を経由して神戸に到着したユダヤ人の記事2本が『神戸新聞』に掲載されているが、そのどちらも難民報道というよりも、むしろ犯罪報道であった。一方は、上海で菓子商を営むユダヤ人が「安全剃刀の刃6千枚」の密入で検挙され、取り調べを受けたという、「密輸」報道である。その人物は、「現金約三千円」を所有

していたため、「背後には相当大掛かりな密入団が介在してゐるのではないか」という嫌疑がかけられた。もっとも、同じ船室におり、同じく逮捕された2人はユダヤ人でなく、ロシア人であった⁴⁷。

もう一つは、1939年春にドイツから上海へ避難した失業中のユダヤ人が、「日本に行けば何とかなるだらう」と密航を試みたが、船員たちに見つかり、船室に監禁された、という記事である。その密航ユダヤ人は神戸港到着直前、脱出に成功、行方不明となり、一時騒然となったが、最終的に上海へ連れ戻されたという⁴⁸。日本の少なからぬ新聞記者たちは、「犯罪種族の猶太人」というナチス思想に近いユダヤ人観を抱いていたようだが、新聞報道は大衆の意識にも多大な影響を与える。少なからぬ日本人がユダヤ人に対して持ちつづける固定観念＝偏見に基づいた悪感情の背景として、こうした新聞報道が果たした役割は決して小さくなかっただろう。

アメリカのルーズヴェルト大統領（Franklin Roosevelt, 1882-1945）の本名がローゼンフェルトであり、彼が実はユダヤ人であるとの噂があった⁴⁹。日本では『神戸新聞』が、「ル大統領の胸にユダヤ勲章」と「ユダヤ財閥の正体」という2本の記事を通して、ルーズヴェルトがユダヤ人と繋がっているとの示唆を読者に与えようとした。

⁴⁶ 「不敵な薄笑ひ 満州里にユダヤ人の群」、『大阪毎日新聞』1940年7月31日。

⁴⁷ 「ユダヤ人の密入 背後に常習団潜むか」、『神戸新聞』1940年3月21日。

⁴⁸ 「密航者失跡で一時大騒ぎ」、『神戸新聞』1940年8月12日。

⁴⁹ Tokayer & Swartz, 前掲書, p.60.

最初の記事は、「ルーズベルト大統領の胸には一つの真新しい勲章が飾られてゐる、即ちアメリカ・ヘブライ勲章がそれなのである—『猶太人の為に特に尽す所があつた』といふ欧州戦乱下の全猶太人の絶賛の贈物である。(…)ル大統領もその夫人も、そして2人の息子も彼等は『マースタ・マソン』の最高級者としてマソン勲章をつけるに至った」と報じているが、この記事の主旨はむしろ「猶族に占領された紐育」の強調にあったようだ。「紐育在住の猶太人は驚くなかれ2百万に達してゐる、紐育の工場3万4千の中3分の2は猶太人に占領され、紐育人は一切切切猶太人の手で造られた衣類を着なければならぬ」などと、あたかもニューヨークの全産業がユダヤ人によって支配されているかのごとき描写である。しかも、「紐育は急激に猶太人によつて氾濫した」こと、つまりニューヨークのユダヤ人たちが「欧州から締め出しを喰らった」難民であり、「米大陸へ渡つて来た」新来者であると書かれている⁵⁰。冷静に考えれば、アメリカへ来て間もない難民たちが、ニューヨークの経済を支配しているなどという主張が、眉唾物であることはわかりそうだ。だが、「ユダヤ人陰謀論」のような思い込みは、冷静な判断を曇らす。

「現在アメリカの政権はユダヤの手中にある」とする2つ目の記事は、典型的な「ユダヤ人陰謀論」である。「ルーズヴェルトの陰に糸を

引くものは実にユダヤ財閥に外ならぬ。(…)アメリカの産業をその手中に収めこれをコントロールすることによつて更に戦争といふ魔術によつてユダヤは世界制覇の夢をみてゐるのだ。世界制覇を夢みるユダヤの秘密結社にフリー・メーソンなるものがある。アメリカ大統領ルーズヴェルトはこの会員であり、結社内にある地位は最高位より2,3番に位するといはれてゐる」⁵¹。

以上のように、ユダヤ人難民を報道する当時の日本のジャーナリズムは、ユダヤ人を共産主義者とみなしたり、悪意に満ちた犯罪者として描いたり、あるいは世界的な陰謀をあやつる者といった、当時どこにでもあった反ユダヤ主義のさまざまなバリエーションを示していた。それにもかかわらず、一部ではそうしたユダヤ人の経済力を利用しようとする意図もみられ、ユダヤ人の在住者の少ない日本では典型的は「当事者不在の反ユダヤ主義」が展開されていたといつてよいであろう。そして、それらの報道は、シベリア出兵の際に西欧の反革命軍経由で導入された日本の「ユダヤ問題専門家」たちの「論理」と一致していた。すなわち、日本の「ユダヤ問題専門家」たちが努力して広めようとしていた「反ユダヤ主義」は、日本へのユダヤ難民の流入を期に、ジャーナリズムを通して一気に広まり、当時の天皇制と「八紘一宇」の論理の中に組み込まれ、国民的なものとなつていった

⁵⁰ 「ル大統領の胸にユダヤ勲章 猶族に占領された紐育」、『神戸新聞』1940年9月13日。

⁵¹ 「ユダヤ財閥の正体 戦争という魔術で世界制覇の夢 ル大統領も結社の一員」、『神戸新聞』(夕) 1940年10月9日。

のではないだろうか。そして、極めて怪しげなことは、これらの日本の「ユダヤ問題専門家」たちは、ナチスの反ユダヤ主義者と同様に、いわゆるシオニズム運動と何らかの関連をもって、それを利用しようとしていたことであり、その結びつきは戦後においても敬承されていることである。しかし、その点に関してはさらに検証する必要がある。

(かねこ まーていん・日本女子大学)